

東京だからできること

高橋達也さんは、烏山高校を卒業後、那須烏山市を離れ東京に上京し、22歳で漫画編集者となった。今も編集長として第一線で活躍している。「漫画」への原体験は子供の頃に、実家のある城東の「柄曲天神の祭り」で飾られていた灯笼に描かれた漫画を見たことだ。当時から強い思いが今の仕事へと結びついている。漫画に関わる仕事は地元ではできない。東京だからできる無二の仕事だ。

数年前、祭りに行きその灯笼を見ると、漫画が近所の子供たちが描いた絵に変わっていて、「変わってしまったな」と思った。それなら今の仕事のスキルを活かし、知り合いの漫画家に灯笼の絵を描いてもらいたいと考えた。しかし、その時は祭りの関係者と繋がりが無く、どうすればいいのかわからなかった。とりあえず那須烏山市と繋がろうとネットで調べ、「ふるさと烏山会」の存在を発見し入会した。

ふるさと大使に就任！

「ふるさと烏山会」とは東京に拠点を置く、那須烏山市出身者と那須烏山市を愛する者の会



〈プロフィール〉
高橋達也さん
那須烏山市出身
漫画編集者 51歳



である。高橋さんは会に入り、ブログを平成25年から始め現在も運営中。他、フェイスブックやツイッターでも発信する。このような活動を那須烏山市が知り、平成29年に市が高橋さんを「ふるさと

大使」に任命した。「ふるさと大使」とは、市町村や観光協会などの代わりに観光振興の広報活動をする人。令和元年11月まで、宣伝用の名刺を配るなど那須烏山市をPRしてきた。「名刺を受け取った人や友人などからの反応は様々だった」と言う。一方で「ふるさと大使に任命されたからといって自らの生き方に変化はない」とも言う。東京に住んでいると出会う人の大半は地方出身者で、必然的にお互いの郷里の話になるので、今まで通りに、那須烏山市について多くの人に認知してもらえるようにPRする姿勢は変わらない。

ふるさととの関わり

今は月に一度、実家で一人暮らしをしている母のために帰省している。兄弟3人、交代で母の面倒をみている。家族の絆が東京と那須烏山をつないでいるのだ。冬の寒々とした景色が好きで、那須烏山市を離れてからも、ふと冬の

那須烏山市の風景を思い出すことがあるという。また、山あげ祭の時は必ず帰省している。「那須烏山市に来る観光客が多ければそれは良いことだが、那須烏山市を市民ではない外の人に変えてしまうのは違うと思う」と言う。那須烏山市民が変化を望むならば変化すればいいし、那須烏山市を出た者としてはこのままでもいい。どのように変化しても、それが郷里の姿なのでからそれを楽しめるという。

那須烏山の未来を想う

高橋さんは那須烏山市に深い思い入れがあると感じた。東京に上京したからこそ、自分のふるさとの魅力に惹かれているのだろう。これまで当たり前だったことに、新しい発見や感動、変化を改めて感じるのだ。歴史的なものに対して、「いいところが残って欲しいと思う反面、変化を見て楽しむこともできる」という言葉から、那須烏山市の未来を大切に思っていることが伝わってくる。

担当：齋藤拓磨

